

---

**真剣で変態と騒ぎなさい！**

薫、

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真剣で変態と騒ぎなさい！

### 【Nコード】

N6238Z

### 【作者名】

薫、

### 【あらすじ】

普通という枠の外に住む生徒たちが数多くの通う川神学園。そこに新たな仲間がやって来た。転入生もまた枠の外に住む存在であり、普通という言葉とは縁のない生活をおくる。その転入生の正体をしたた者は同じ感想を抱く「変態」と……。  
変態の称号を我が物とする主人公、一ノ瀬響と周囲の人間が繰り広げる日常を書いた物語。

バトルもありますが基本的に緩い話で進行していきますので、主人公最強系、チート、俺TUEEE!を読みたい方のご希望には副い

かねますのでご了承ください。

## 第1話 現れた変態

「突然だが転入生が来る」

私立川神学園、変わり者たちが通う教育機関である。

もちろん誰も彼もが変わり者ではなく普通の生徒も存在してる。

しかし、それは少数派でほとんどの生徒が一癖も二癖もある性格をしていることは間違いない。

川神学園の変わり者の中で『成績が悪い』『素行不良』『協調性に欠ける』などの評価を受けた生徒が集められるクラス【2年F組】。

そんなクラスの担任を任されている小島梅子の言葉が教室に響き渡った。その一言で静かだった教室内は担任が来る前のガヤガヤと騒がしい状態に戻り、皆好き好きに話始める。

「静粛に！」

バチン！と音を立てたのは小島梅子。普段から携帯している鞭で床を叩く音だった。

たった一喝でうるさかった生徒たちは口を閉じ背筋をピンと正す。これが小島梅子がこの問題児軍団であり2年F組を任されている理

由の一つ。

床を叩いたのは警告なのだ。これ以上うるさくすると床ではなく自分の身に鞭が飛んでくことを生徒たちは知っていた。

「先日クリスが来たばかりだが新たな仲間だ。皆、歓迎するように」

静かになった教室を見渡した梅子は一度頷くと言い聞かせるように話した。

「先生、しつもん」

「なんだ小笠原」

「その転校生って男の子ですか？ それとも女の子？」

「実はもう来ている。入ってきていいぞ」

梅子の言葉が聞こえたようで廊下に待機していた転入生が扉を開けて教室へと入ってくる。

その姿を見た生徒たちは二通りのリアクションを取った。目を輝かせて喜びの表情を浮かべる者、肩を落とし落胆の表情を浮かべる者に分かれる。

中には興味のなさげな生徒も居たが、それはごく少数であり窓の

外を見たりしていた。

コツコツコツと足音を立て教卓のある場所まで来た転校生は、生徒たちに背を向け細い指で白いチョークを持つと丁寧な字で名前を書いている。

何も書かれていなかった黒板には『一ノ瀬響』と真っ直ぐに書かれていた。

書き終えた転校生、一ノ瀬響は振り返り口を開く。

「一ノ瀬響だ。よろしくやってくれ」

ザワツ……………!

教室に流れるのは困惑の色。

「えっ……………あれ？ でも、え？」

誰の発言かはわからないが、この教室にいる全ての者が抱いている感情だろう。

「先に言っておく。私は“男”だ」

「でも……………その制服は……………」

「事情があつて今日はこれしかない。この姿では説得力に欠けるが私は変態ではない」

そう転校生、響が身に付けていたのは女子の制服であり、自称“男”と名乗っている響が本来着ているべき制服ではなかった。

好んで女子の制服を着ているのではないと言いたいようだったが、本人が言っているように説得力の欠片もない。

そもそも一ノ瀬響という人物が本当に男なのかも怪しい。声は男性のソレではあるが透き通っており声の低い女性に聞こえないこともないし、生徒たちに少し涙目で“男”だと訴えている姿も自分から言っているのではなく、誰かに言うように強要されている方が納得できる。

極めつけは、その容姿である。

後ろで束ねられた長く伸ばした艶のある黒髪。少々キレ目ガチだが大きな瞳。高い鼻に美しく伸びた鼻筋。触りたくなるような欲求に駆られる唇。

制服の上からでも分かるほどに細い体の線。袖から出ている手は白く指も傷1つない綺麗なもの。スカートの下から伸びてある足も見事なまでの脚線美。

一ノ瀬響を形成する1つ1つのパーツが彼(?)が“男”であることを否定していた。

本人の“男”発言より、見るだけでわかる容姿から判断できる性

別を信じてしまうのは仕方ない、というより当然である。

今日から仲間になるクラスメイトたちの疑惑の視線に耐えかねたのか、響は自己紹介をした時よりも大きな声で言葉を発した。

「男子で信頼のある人物はいるか？」

生徒たちはグルリと顔を周囲に向けると、一人の男子生徒を指さし名前を呼んだ。

「直江大和だ。で、俺は何をしたらいいのかな？」

「では大和とやらこっちに来てくれ」

「いいけど……何をするんだ？」

「来ればわかる」

クラスメイトから選ばれた直江大和は響が手招きするままに近くまで寄っていくと肩に腕を回され拘束される。

その瞬間にビクツと体を揺らした女子生徒が居たが誰も気付かなかった。

拘束した響はその状態のまま教室の端へと大和を引き連れて歩いていく。



数秒後。

方針状態で教卓の前に立つ大和が居た。

「……………付いてた」

ボソツと呟き視線を下に移していく。

「付いてたって……………まさか、ナニがか……………？」

教室へと入ってきた響の姿を見て、この教室で誰よりも歓喜の表情を浮かべていた生徒、島津岳人が反応する。

「ああ、男性の股の間にあるべきものがだ」

2年F組の男子の中で信頼されている大和の言葉とはいえ、誰もが信じられないと言いたげな顔をしている。岳人などは信じられないというより信じたくないという気持ちの方が大きい。

「百聞はナンタラ。自分の目で確かめねえと俺様は信じない。という

ことで一ノ瀬、俺様もいいか？」

おそらく『百聞は一見にしかず』と言いたかったのだろう。岳人は立ち上がると響へと近付いていく。

「恥ずかしいのだが……まあ、仕方ない」

自分が男だと証明するとはいえ体の……それも下半身を意図的に見せるのが恥ずかしいのか一瞬返答を躊躇った響だったが、疑惑の視線を浴び続ける苦悩と一時的な羞恥を天秤に掛け、岳人に見せ証明する方を選んだ。

「俺様は今日初めて現実を否定しなくなっただけ」

「……この二人を見てもらえばわかると思うが私は男だ」

自称男と言う疑惑の転入生が男だという肉体的証拠を見た二人にチラツと視線を送ると、目の前にいるクラスメートたちに宣言する。心なしか誇らしげな表情を浮かべる響だった。

第1話 現れた変態（後書き）

感想などをいただけると嬉しいです！

## 第2話 咆哮する変態

川神学園、2年F組の教室には何とも言い難い難い空気が流れていた。この空気を生み出した張本人である一ノ瀬響は誤解が解けたと誇らしげな表情だったが、まだ“男”であることしか証明できていなかった。

容姿はどうあれ響が男であることに納得した2年F組の生徒たちだったが、『男であるなら何故、女子の制服を着ているのか』という疑問を抱かずにはいられない。

女装趣味の変態という可能性もあったが「変態ではない」と発言しており響はそういった人種ではない。ただし響が本当の事を言っていたと過程すればの話だったが、本人の真剣な雰囲気からするに真実なのだろうと大半の生徒は考えていた。

しかし、信じているのと好奇心は全くの別物であり、聞きたいことは聞くというのは自分に正直なF組らしいものだった。

「男だつてのはわかったけど、それなら何で一ノ瀬さんは女子の制服を着てるの？」

騒がしいF組の中でも大人しそうな生徒、師岡卓也がクラス全体の疑問を口にする。

質問を受けた響は、うーん、と片手で頭を押さえると黙ってしまった。数秒ののち正面を向いた響は少し恥ずかしそうにしながら話し出す。

「これはだな、その、母の所為なんだ。母は私を女として扱っていてな……幼少の頃は何も思わなかったのだが、今はかなり辛い……そして痛い」

響から語られた女装の理由を聞いた生徒たちは納得する。

『あー、それならば仕方ない』と。

目の前にいる響は黙っていれば完全に女性にしか見えず、十人に聞けば十人が女だと答える容姿をしている。本人の口から「男だ」と聞いても信じる人間の方が少ないだろう。

「だからだな、私は女装好きな変態ではないことを理解してほしい」

最後に「改めてよろしくたのむ」と締め括ると、響は2年F組の仲間へと笑みを向けた。

「うむ。あとは休み時間にも質問するといい。これにてホームルームを終了する。甘粕」

「起立、礼！」

2年F組の委員長である甘粕真予の号令によりホームルームは終

わりを告げた。

「島津、悪いが机を運んでくれ。急な転入だったのでな。ノ瀬の席がないのだ」

「お安いご用だぜ」

机を運んでくるように頼まれた岳人は、梅子と共に教室から出ていった。

午前の授業を何の問題もなく受けた響だったが、授業以外で問題が起きていた。

ガヤガヤ……。

そう、休み時間になるたび教室の前に他のクラスから響の噂を聞き付けた生徒が押し寄せてくるのだった。

そして響の姿を見た連中から聞こえてくる言葉の中には、かなり

危ない発言もあつたりして響のテンションは下がり続ける一方。

「そんなに気にするなって」

「明日には騒ぎは治まるはずだから」

用意された席に突っ伏し目に見えて元気のない響に、周囲に居た者が声をかける。

「君たちは……島津君と直江君だったかな？」

「岳人だ。名前で呼んでくれ」

「俺も大和でいい。それより昼御飯一緒に食べないか？」

声をかけたのは朝のホームルームで響が男だという証拠を見た二人だった。

「そんな時間か……気付かなかった」

「コレだけの視線に晒されたら、そうなるのも仕方ないよね」

「さすがモロだぜ。女装が得意なだけあって一ノ瀬の気持ちかわかるのか」

話に混ざってきたのは師岡卓也。彼は去年、体育祭で女装をしたことがあり響までとはいかないが、同じような視線を浴び続けた経験の持ち主だった。

「違うよ！ 大変だったんだからね。思い出だけでも寒気がするよ」

「話もいいが、早く学食行かないと時間がなくなるぞ」

「そうだった。案内するから倒れてないでーノ瀬も立て！」

無理やり立たされた響は半ば強引に大和たちに連れられて学食へと向かっていった。

学食へとたどり着いた響を待ち受けていたのは、これまた針のような視線の数々。

そろそろ慣れてきてもいい頃だったが本人は相変わらずテンションが低くなってしまふ。

そんな響の様子に気付いた大和は学食内ではなく人が少ない場所へと食べようと提案し、皆それに同意し各々注目したものを持って移動した。

「3人は仲が良いのだな」



サンドイッチを食べていた響が昼食に誘ってくれた3人を見て話  
す。響からは大和、岳人、卓也が友人では止まらない存在、所謂親  
友同士に見えていた。

「そうか？」

「小学校の時から一緒だからね」

「一ノ瀬は小学生の頃もそんな感じだったのか？」

「響でいい。そうだな……周囲とは違うことはわかっていたが、そ  
んなに違和感はなかった。高学年になる頃には男らしい格好をした  
いと思っていたのだが……」

「願いむなしく今の状態になってことか」

「うむ、その通りだ」

響は皿に乗っていた残りのサンドイッチを口の中に放り込むと、  
十数回顎を上下させ飲み込み、手を会わせて食事を終わらせる。

周囲に晒され続け疲弊していた響だったが、腹にものを入れたこ  
とで幾ばくか気持ち楽になったようだった。

「お前たちは良いやつだな。普通、女装したやつを避ける人間は居  
ても、こうやって食事に誘ってくれる人間は少ない」

「この学園に居れば普通という言葉が意味を成さないからな」

「そうそう、この一見大人しそうなモ口も変態だしな」

「変なこと言わないでよっ！ 僕はいたって普通だね」

「落ちてる綺麗な髪の毛を見ると拾うんだろ？」

「響も気を付けるよ。いつも髪の毛を狙われてるぜ？」

「わー！ その話は忘れてよ……」

「ハハハ、私は君たちが好きだ」

作り笑いではなく心からの笑顔で正直な気持ちを口にする響。

転校してきてから初めて見せた笑顔だった。

響は男である。しかし容姿は男というより女、それも美少女。

そんな美少女の容姿をした響が意図してないにしても笑顔で「好きだ」と言ったのだ。

もちろん、響は男であり大和たちも男。

響の口にした「好き」という言葉は友人に向けるものであり、恋愛感情とは何ら関係もない。

それは好きと言われた本人たちもわかっているが

「「「……………」」」

3人は言葉を失ってしまふ。

しつこいようだが響の容姿は女性。何気ない仕草も男のものというより女性寄りな印象を受ける。

男だとわかっていても、視覚的には美少女の響から「好き」と言われればドキッとしてしまうのも仕方のないこと。

悲しいかな、男として当然の反応なのである。

「ん？ どうしたんだ？」

自分の言葉で三人が固まってしまったことに気付いていない薫は不思議そうな顔をしながら首を傾<sup>かし</sup>げた。

「い、いや何でもない」

三人の中で一番に我に帰ったのは大和。誤魔化すように両手を振ってみせる。

「うん。何でもないよ」

「そうそう、別に響の言葉にドキっとしたなんてことはないぜ……  
あっ」

「「「「」……………」」」」

先ほどのよりも長く、そして重い空気を持った沈黙が場を支配するよつに流れる。

一秒、二秒、三秒

どれくらい時間が経った頃だろうか、四人の中で唯一動く人物が  
でた。

肩をわなわなと震わせ顔を真っ赤にし息を吸い込む動作を行なっている。

「私は男だあああっ！！！」

川神学園の敷地内に響の大きな声が轟いた。

## 第2話 咆哮する変態（後書き）

感想などを頂けると嬉しいです！

### 第3話 緊縛と変態

「そっぴや何で私なんだ？ 男だったら俺とか僕でいいじゃねーか」

「本当はそうしたかったのだが、母がな……許してくれなかったんだ」

岳人の問いに響はげんなりした顔を浮かべながら答えた。

「ビッキーのお母さんも徹底してるね」

響のことをビッキーと呼んだのは卓也。目に見えて元気のない響を見て卓也は同情を感じられずにはいらなかった。

「逆らわなかったのか？」

過去に飼っていたペットを親に殺すように言われた際、拒否することで褒められたことがあり、自分の意見、それも正しい意見ならば通すことの大切さを知っている大和が当然の疑問を聞いた。

「逆らおうものなら拘束されるんだ」

「あー……もしかして今日の休み時間に使ったアレか」

「アレには驚いたぜ」

「急に出てくるんだもん」

「何度もされているうちに自然と身についた。何かと便利なんだが理由を考えると少しブルーになる」

大和たちの言っているアレというのは今日の昼休みに起きた出来事に出てきたものであった。

昼休み。

「なあーノ瀬、頼みがあるんだけどちょっといいか？」

「えーと………すまない君は？」

「福本育郎、仲の良い奴らからはヨンパチって呼ばれてる。一ノ瀬もそう呼んでくれ」

「そうか。なら私のことも名前でも呼んでくれ。もしくは適当な愛称で呼んでくれても構わない」

「昼食を摂り終えた響に話し掛けてきたのはカメラを首にぶら下げているのが印象的な少年、福本育郎だった。」

「それで頼み事とは？」

「そうだそうだ。一ノ瀬……いや響！ 俺の被写体になってくれ！」

「被写体？」

響は目の前にいる少年、育郎が手に持ち変えた十数万はするようなカメラに視線を移し『なぜ？』といったような表情を浮かべる。

「頼む！ この通り！」

「そ、そこまで頼まれたら引き受けるのも吝かちかではないが……いったい何の写真を撮るんだ？」

「それはだな……」

次の発言を勿体ぶるようにして口を閉ざした育郎はポケットから真新しい携帯電話を取り出すとポチポチと操作した。

そして数秒もしないうちに携帯の画面を響へと向ける。



「もしかしてヨン……君はこの画像と同じ格好を私にしると言うのか？」

携帯の画面に写し出されていたのは、アニメもしくはゲームに出てくるキャラクターだった。それも男性ではなく女性キャラ。

それだけでも響を不愉快にさせるのには十分なのだが、追い討ちをかけるかのように育郎のゲスな視線が注がれる。

「女子に断られるのはわかってるから響しかいないんだよ」

「断る。女子で嫌がるのだから私がするわけがないだろう」

「響なら絶対に似合う！ 今日だって何回トイレに行ったかわからねえよ」

「何を言っているかはわからないが断らせてもらう。他を当たってくれ」

育郎の言葉を聞き『はて？』と不思議そうな顔を一瞬浮かべたものの、女装してくれという頼みはきっぱりと断った。

己の趣味で女装をしているならば喜んで引き受け、響と育郎の両者が得をするということもあるが、残念ながら響は望んで女装をしているわけではないのだ。

今も育郎の手の中にある携帯の画面には可愛らしい容姿をした女性キアラが映っているが、断られたことで心なしか寂しそうな表情に見えた。

「他の事なら私も力になりたいのだが……すまないな」

そう言った響は少し離れた所にいた大和たちの方を向くと歩きだしていつてしまった。昼休みの間に校内を案内してもらおう約束をしていたのだった。

「待ってくれよお」

頼みをきっぱりと断られたにも関わらず育郎は諦めきれなかったのか、離れていく響を後ろから半ば抱きつくようにして引き留めにかかった。

育郎が響の体に触れた瞬間に異変は起きた。

自分に……それも体ではなく身に付けている制服に指が掛かると同時に響は反転しながら後ろへと数歩下がると腕をバツと突き出した。

その動作からコンマ数秒遅れて響の腕　正しくは上着の袖口から何かが飛び出る。

「ぎゃああああ……」

聞こえたのは育郎の叫び声。突如として飛び出した何かは育郎の身を襲ったのだ。

「わ、私の体に触れるな！」

川神学園に来てから初めて見せる表情だった。普段は温厚とまではいかないものの怒りの感情を剥き出しにしない響だったが、自分の体に触れられることだけは許せないらしい。美少女そのものと言っても過言ではない整った顔には怒りの表情がはつきりと張り付いていた。

「ヨンパチー大丈夫かあ？」

一連の出来事を遠巻きながら見ていた大和たちが育郎のもとへと駆け寄ってくる。

「……………痛てえよ。頼むからこの縄取ってくれ……………」

助けを求める育郎の体には縄が巻き付いていた。しかもキツめに縛られているのか、手からは血の気が引いていたりする。

そう、響の袖口から飛び出したのは縄。

発射された縄は標的へと真つ直ぐに伸びて行き、まるで意志があるかのように育郎の体に絡み付いたのだった。

数分後、岳人の手によって救いだされた育郎は少し涙目になりながら、響へと謝罪の言葉をかけていた。

「いや、私の方こそすまない」

時間が経ち落ち着いたらしく冷静になった響は申し訳なさそうな表情を浮かべ謝る。この時の表情を見た大和たち四人は『可愛い』と思ったようだったが、再び響を怒らすことになるかとわかつていたので口にはすることはなかった。

「ヨンパチの自業自得だから、ビッキーが気にすることないよ」

昼食時のことがあり沈黙が続くのを嫌った卓也がフォローを入れる。それに賛同するように岳人も続き響に「気にするな」と声をかけていく。

「うむ。だが、そこまで酷くする必要もなかった。お詫びになるかわからないが、この姿で良いのなら写真におさめてくれても構わない」

その言葉を聞いてからの育郎の立ち直りは早かった。縄から解き放たれた後も地面に転がり痛みに苦しんでいたのに、一瞬で飛び上がりカメラを両手に持ち響の姿をレンズで捉えていた。

「早いな……というか何だか嵌められたような気がするのだが」

昼休み、川神学園のとある場所で密かに響の撮影会が行われたのだった。

この後、この写真を中心に騒ぎが起こるが、それはまた別のお話。

第3話 緊縛と変態（後書き）

感想などを頂けると嬉しいです！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6238z/>

---

真剣で変態と騒ぎなさい！

2012年1月6日18時45分発行